令和７年第３回　北海道議会定例会〔予算特別委員会（経済部審査）〕開催状況

開催年月日　令和７年９月３０日（火）
質　問　者　民主・道民連合　広田　まゆみ　委員
答　弁　者　次世代社会戦略監、ＤＸ推進課長

質　問　要　旨	答　弁　要　旨
二　ゼロカーボン推進のためのデジタル技術の活用について **（一）これまでの取組について** **（広田委員）** まず、端的に、これまでの取組について伺いますが、道として、どのように、ドローンやＡＩの活用による地域課題解決の重点的なテーマ設定をされていたのか、その上で実用化や地域課題解決のために、どのように取り組まれてきたのか伺います。 特に、吸収源対策としてのブルーカーボンは、沿岸地域が広い北海道にとって、非常に重要だと考えますが、ブルーカーボン推進のためのＡＩやドローン活用促進について、どのように扱われてきたのか伺います。	**（ＤＸ推進課長）** これまでの取組についてでございますが、道では、地域産業の担い手不足といった課題への対応はもとより、暮らしの質の向上や産業の活性化を図るためには、あらゆる分野でデジタル化を加速していくことが重要と考えておりまして、毎年度、市町村の地域課題に関する調査を行うとともに、その解決に向け、ＡＩなどのデジタル技術を持つ企業とのマッチングを進めてまいりました。 こうした取組により、児童や保護者が安心できるようにするためのスクールバスの運行状況の可視化や農地パトロールの業務軽減のための衛星画像の活用、高齢者見守りのための電力使用データの解析など、市町村と企業による実証事業が行われております。 また、道としまして、昨年度、被災状況の確認など、緊急時にドローンを効果的に活用するため、日頃から操作に習熟しておくことをテーマに、ブルーカーボンクレジットの申請に必要な養殖昆布の資源量把握を、平時の活用事例として実証したところであり、こうした実証の成果を、道内市町村等と共有してまいりました。
（二）今後の取り組みについて **（広田委員）** ＡＩやドローンなど、たくさん取り組む分野があると思いますけれども、吸収源対策としても、ブルーカーボンは、非常に重要であり、ゼロカーボン推進計画におきましても、「ブルーカーボンに資する藻場・干潟の保全や生態系の維持・回復など漁業者等が行う多面的な機能を発揮させるための取組を支援する」とあります。 現在策定中の次期北海道 Society5.0 推進計画に、デジタル技術を活用してブルーカーボン推進を始めとする脱炭素化に取り組むことを盛り込んで、道として強力に推進すべきと考えますが、見解を伺います。	**（次世代社会戦略監）** 第２期 Society5.0 推進計画についてでありますが、第２期計画は、2020 年３月に有識者の方々にとりまとめていただきました北海道Society5.0構想で掲げます2030 年頃の未来社会の実現に向けた取組を推進するための、後半５年間の計画と位置付けております。 このため、ＡＩなどの未来技術活用の更なる推進によりまして、産業競争力の抜本的な強化や地域社会の活性化、より質の高い暮らしを実現するなどとしております基本理念や、５つの政策の柱を掲げます取組方針、これらにつきまして、現行計画との連続性を確保いたしますとともに、近年の経済、社会情勢を踏まえまして、あらゆる場面で脱炭素化を意識する、このことを、新たに取組方針に加えることといたしました。 道では、先般、この骨子案を取りまとめたところでございまして、今後、有識者の方々で構成いたします北海道 Society5.0 推進会議のご意見を伺いながら、計画に掲げております未来技術を活用した活力あふれる北海道の実現に向け必要な施策について、更に検討を進めてまいります。

質　　問　　要　　旨	答　　弁　　要　　旨
（指摘） **（広田委員）** 　指摘ということにしますけれども、なぜ、このブルーカーボンを特出しにしたかというと、水産林務部の各部審査でも議論してきましたけれども、この海藻由来のブルーカーボンは、日本政府が世界に先駆けて、初めて国際機関にその吸収量を登録しているという先進的な取組です。 もう一つは、北海道科学技術振興条例や振興計画の基本目標などにも、まずは、北海道の農林水産物等の資源や地域特性を生かすこと、そして、北海道の再生可能エネルギーのポテンシャルが日本全体の課題の解決に寄与するというところを科学技術振興条例や振興計画にも定めていますので、色々な、ラピダスも含め新技術の開発が非常に取り上げられていますけれども、基本は、この元々地域にある資源を組み合わせて、どう高付加価値化していくかというところに、科学技術が使われるべきだと思いますので、ブルーカーボンについて、しっかり、重点としていただくことを指摘させていただいて質問を終わります。	